

文学作品を読む言語活動の評価：
「わにのおじいさんのたから物」を読み、書いたつづき話を評価し合う授業実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, みずき メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024694

文学作品を読む言語活動の評価

～「わにのおじいさんのたから物」を読み、書いたつづき話を評価し合う授業実践～

川口みずき

Evaluation of the language activity which reads literary work

Lesson practice for discussion about an imagined sequel to a story of

“wanino ojiiisanno takaramono(treasure for an old crocodile)” after reading

Mizuki Kawaguchi

要旨

これまで文学作品を読む言語活動（「つづき話を書く」）については、充実した実践研究がなされてきた。しかしながら、その言語活動をどのように評価するかについては十分に検討されてきていない。そこで本研究は、つづき話をお互いに読み合う過程を意図的に配置することで、つづき話を作品の内容と関連付けながら評価していく授業実践を組織した。本稿では、実際の指導過程と子どもたちの交流の様子について考察を加える。

キーワード： 言語活動 つづき話 評価

1 問題の所在

「つづき話を書く」という文学作品を読む言語活動については、これまで充実した実践研究がなされてきた。しかしながら、その言語活動をどのように評価するかについては、十分に検討されてきていないという現状がある。

つまり、文学作品を読むという単元前半の活動と、つづき話を書くという単元後半の言語活動のつながりが意識されず、言語活動でつづき話を書いても、お互いにつづき話を読み合うだけで学習が終わってしまい、読みの力をつける評価がなされていないと言える。

したがって、つづき話をお互いに読み合う活動を、単元構想の中に意図的に配置した。それにより、つづき話を作品の内容と関連付けながら評価していく授業実践を行った。

2 研究の課題

(1) 研究のねらい

言語活動をどのように評価するのかという検討は十分にされていない現状を踏まえ、本研究では、「つづき話を書く」という言語活動を設定し、書いたつづき話をお互いに読み合う活動を単元構想の中に意図的に配置することにより、作品の内容と関連付けながらつづき話を評価していく授業実践をねらいとして研究を行う。実際の指導過程と、子どもたちの交流の様子について明らかにし、考察を加えていきたいと考えている。

*附属静岡小学校

(2) 研究の課題

研究課題1 子どもが「自分の書いたつづき話を、作品の内容と関連付けながら評価し合う」ための指導計画の立案

研究課題2 指導計画の実施と実施過程の分析

本研究は、附属静岡小学校3年3組を対象とする。つづき話を書いたことはあるが、作品の内容と関連付けて評価し合ったことのない本学級の子どもが、作品の内容と関連付けながら、自分たちが書いたつづき話をお互いに評価し合う指導計画を立案、実施し、実施過程の分析を行う。

3 「わにのおじいさんのたから物」を読んで「つづき話を書く」意義

つづき話とは、物語のつづきを、子ども自身が想像し、考えて書く活動である。「わにのおじいさんのたから物」は、「おにの子は、いつまでも、夕やけを見ました。」という文で終わっている。足もとに埋まっているたから物には気が付かず、目の前の美しい夕やけをたから物だと思ったおにの子が、いつまでも夕やけを見ているところで物語が終わっているため、誰もが、その後起こる出来事を想像したくなる物語の終わり方である。したがって、本学級の子どもも、物語の終わり方に注目し、「この後、どうなるのかな」「つづき話を考えて書きたいな」という思いをもちやすいだろうと考えた。

さらに、つづき話を書く際、夕やけがたから物であ

ったことをおにの子が報告したとき、わにのおじいさんはどんな言葉を発するのかを考えることで、わにのおじいさんの人物像を再度とらえ直し、物語を読み深めることができる教材である。わにのおじいさんにとって、たから物を守ることに全てをかけてきた自分の人生とはどんなものだったのか、また本当のたから物とは何なのかという、わにのおじいさんの価値観にもつながる問いを考えることで、人物像についてより深く読み取ることができると考えた。また、つづき話を書く活動により、夕やけをたから物だと思ったおにの子の純粋さや心の美しさについても、さらに深く読み取ることができると考えた。

また、「文学作品を読む能力の発達に関する研究—つづき話>の量的分析を中心として—」によれば、「書き手（読者）は作品世界をどう語り継いだか」「登場人物の『おにの子』は『夕やけ』をどう捉えているか」「書き手（読者）自身は『夕やけ』をどう捉えているか」「『わにのおじいさん』をどのように扱っているか」「つづき話のなかに原テキストの登場人物以外の人物が登場するか」「その他」という六つの観点から、子どもの書いたつづき話を分析している。そして、「自身の素朴な脈絡にしたがって解釈を作り上げ、それに基づいてつづき物語の世界を作り出す就学直後の低学年の子どもは、次第に作品に固有の『語り』を内面化し、一体化しようとする」「そうした、『作品の語り手を内面化し、作品を統括的に見渡すことができる視点を獲得する』段階は、小学校高学年をピークとして、完成を見る」という結論を踏まえつつ、小学校3年生の段階の子どもが書いたつづき話について、本実践において分析を行うこととする。

4 「つづき話を書いて評価し合う」指導計画の立案

（1）指導計画立案のポイント

「つづき話を書く」ことと「つづき話を評価し合う」ことに向けた指導計画の立案にあたっては、次の2点に留意した。

- ①作品の内容と関連付けながら「つづき話を書く」こと
- ②作品の内容と関連付けながら「つづき話を評価し合う」こと

（2）指導計画の立案

1）作品の内容と関連付けつづき話を書き評価する

学習してきた読みを大切にしながら、作品の内容と関連付けてつづき話を書くことを意識することができるよう、勉強してきたことを生かしてつづき話を書くという単元の見通しを子ども自身がもてるような指導計画を考えた。さらに、このような見通しを最初にもつことで、お互いのつづき話を読み合う際にも、作品の内容と関連付けながら評価することができるであろうと考えた。

2）指導計画の実際

「わにのおじいさんのたから物」（学校図書 3年下）を読み、つづき話を書いて評価し合う単元（全9時間）を以下のように計画した。

時	学習内容
1	「わにのおじいさんのたから物」を読んで、おもしろかったところを話し合う。
2・3	おにの子の人物像について考える。
4・5	わにのおじいさんの人物像について考える。わにのおじいさんが、初めて出会ったおにの子に、大切なたから物をあげようと思った理由を考える。
6	夕やけをたから物と思ったおにの子の気持ちを考える。
7	おにの子のたから物と、わにのおじいさんのたから物を対比して考える。これまで学習してきた登場人物の人物像を生かして、つづき話を書く。
8	お互いのつづき話を読んで考えたことを交流することで、評価し合う。
9	第8時に評価し合ったことを生かし、書き加えたり書き直したりして、自分の作品を見直す。最後にもう一度、自分の書いたつづき話を伝え合い、感じたことを交流する。

3）評価後、自分の作品を見直す時間を設定した意図

つづき話を評価し合った後、自分の作品を改めて見直す時間を設定することで、作品の内容と関連付けて書かれているかという視点でもう一度振り返ることができると考えた。そして、つづき話に書き加えたり、もう一度書き直したりするを通して、読みがさらに深まっていくだろうと考え、自分の作品を見直す活動を単元の終末に位置付けた。

5 学習の実際

（1）第1時の学習

「わにのおじいさんのたから物」を読んで、おもしろかったところを出し合った。子どもから出た意見を分類すると、「物語の設定」、「登場人物の人物像」、「対比の表現」、「物語の展開」についての4点に分けられた。

1）物語の設定

登場人物に注目したり、題名に注目したりして、物語の全体をつかむことができた。

また、季節や場所が分かる表現に注目した発言から、物語の設定を整理していった。子どもは、「へびもかえるも、土の中にもぐりました。からすが、寒そうに鳴いています。」という冒頭の表現に注目し、「この文から、季節が冬だということが分かるのがおもしろい」と発言した。また、わにのおじいさんが眠っていた場所に注目し、「川岸は見つかりやすいのに、わにのおじいさんは、『もう、ここまで来れば安心だ』と思ったのがおもしろい」と発言した子がいた。

他にも、わにのおじいさんの背中やしわが、たから物のかくし場所を記した地図になっているところにおもしろさを感じている子どもたくさん見られた。

2) 登場人物の人物像

①おにの子の人物像

おにの子の人物像については、「わにのおじいさんのために、朝から夕方近くまで葉っぱをかけてあげたから、優しい子だ」という意見が多かった。また、おにの子が夕やけをたから物だと思う最後の場面に注目し、「かわいそう」と述べた子と、「自分のたから物を見つげられたからよかった。」と感じた子どもがおり、おにの子に対する子どもの解釈が分かれていることが分かった。

②わにのおじいさんの人物像

命をかけて守ってきたたから物をおにの子にあげた場面に注目し、「どうしてたから物をあげたのかな」という問いをもった子が多かった。

3) 対比

子どもはおにの子のたから物とわにのおじいさんのたから物とを比較し、両者の思いが違っていることにおもしろさを感じた。

4) 物語の展開

足もとに埋まっているわにのおじいさんのたから物に気付かないまま、夕やけを見続けているおにの子に対して、「おにの子は、足もとに埋まっているたから物を見付けられなかったから、かわいそう」とR子が発言すると、何人かの子から同意の声が上がった。それに対し、「たから物を入れた箱が埋まっていることに気付かないのはかわいそうだけれど、世界中でいちばんすてきな夕やけを見ることができて、おにの子はよかったんだと思う。」という考えも出た。この物語の展開について、A子やT子は「わにのおじいさんが『足もとに埋まっているよ』と言ってくれば、たから物があることを知ることができたと思う」と述べ、C男やS男は「どうしてわにのおじいさんは、たから物が地面にあることを言わなかったんだろう。おにの子に、足もとに埋まっていると教えたい。」と自分の思いを発言した。

そして、おにの子は、わにのおじいさんのたから物を知らないまま終わるという物語の展開に対して、「この後は、どうなったんだろう」「つづきが知りたいな」という思いをもった子どもが多くいた。物語の展開に注目した子が多かったことから、「つづき話を書きたい」という子どもの思いが共有されていった。

5) 言語活動と読みの視点の共有

上記の様に、物語の展開に注目した子どもは、「つづき話を書きたい」という思いをもった。そして、「つづき話を書くために、登場人物の人物像や対比などの表現に注目して物語を読んでいこう」という読みの視点を共有した。これにより、「学習したことを生かしてつづき話を書こう」という子どもの意識につながり、単

元の見通しをもつことができた。

(2) 第2・3時の学習

第2・3時は、つづき話を書くために、おにの子の人物像について読み取ることをねらいとした。子どもは「おにの子ってどんな子かな。」という問いをもち、おにの子の気持ちや人柄が分かる叙述に線を引いて、その言葉から分かる人物像を考えていった。

1) おにの子がかぶっているぼうしについて

①おにの子のぼうしに対する子どもの読み

最初に、子どもはおにの子がかぶっているぼうしに注目した。そして「どうして、おにの子はぼうしをかぶっているのかな」という問いをもった。対話を通して、子どもは以下の様な考えをつくっていった。

- ・おにの子は、角があるからぼうしで隠している。(S男)
- ・おには、乱暴で悪いイメージがあるから、人間に捕まらないように角を隠していると思う。(B子)
- ・人間につかまって、いじわるや悪さをされないようにおにだとすることを隠している。(Y子)

おにの子にとって、帽子が大切な意味をもっているということに気付くと、子どもは最終場面に目を向け、「最後に思わずぼうしを取ったのはどうしてかな」という問いをもった。「思わず」という言葉や、夕やけの美しさを表す叙述に注目して考え始める子もいた。

②絵本の冒頭部分との関連性

「わにのおじいさんのたから物」は、絵本「ぼうしをかぶったオニの子」(あかね書房)所収の5編の作品のうちの一つである。絵本では、冒頭に「ぼく オニの子/ぼうし かぶれば/ふつうの 男の子/ぼくひとりぼっち」という一文がある。

おにの子がぼうしをかぶっている意味が、この冒頭の叙述と関連付けることによっても考えられる。本単元においては、いつもかぶっているぼうしを思わず取って、夕やけを見ている最終場面のおにの子の気持ちを考える際の資料に活用しようと考え、第2時終了後、全員に絵本の内容を配付し、読書活動につなげていった。

2) 子どもが読み取ったおにの子の人物像

子どもが叙述から読み取った人物像については、大きく分けると以下の3点である。

①優しくて思いやりのある子

子どもは、「そのあたりの野山を歩いて、地面に落ちているほおの木の大きな葉っぱを拾っては、わにの所に運び、体のまわりにつみ上げていきました。」という叙述に注目し、「拾っては」「つみ上げて」という言葉から、何度も何度もかけてあげていることに気付いた。また、「朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって」という叙述から、長い時間ずっと葉っぱをかけるおにの子の優しさを讀んだ。

また、「どうして、わざわざ野山を歩いて葉っぱを拾ってきたのかな」という問いをもった子どもは、「ほお

の木の大きな葉っぱ」という言葉に注目し、わにのおじさんの体は大きいから、ほおの木の大葉っぱがいいと考え、わざわざ野山まで歩いて探しに行ったおにの子の気持ちを想像した。

②言葉遣いが丁寧で礼儀正しい子

「死んでおいでかと思ったのです。」というおにの子の言葉遣いに注目した子どもは、「死んでいるかと思ったのです。」という言い方と比較して、言葉遣いがとても丁寧であるため、おにの子は礼儀正しく、相手の気持ちを考えられる子だと読んだ。

③勇気があり、あきらめない子

おにの子が、たから物を探しに向かう際の叙述である「おにの子は、地図を見ながら、とうげをこえ、けもの道を横切り、つり橋をわたり、谷川にそって上り、岩あなをくぐりぬけ、森の中で何度も道にまよいそうになりながら」に注目した子どもは、おにの子がたどった長い道のりについて、叙述を基に想像した。「けもの道なんて怖い」「つり橋は揺れるから怖い」「何度も道にまよいそうな大変な道ばかり通っている」「自分だったらとても行けないよ」という自分の思いと重ねて、子どもはおにの子の人物像についての読みをつくっていった。

おにの子の通った道のりは険しかったことを踏まえ、たった一人でこの道を歩く不安や、怖さを想像し、勇気があってあきらめない子だと読んだ。

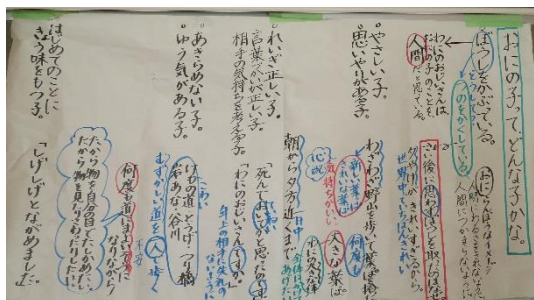
(3) 第4・5時の学習

前の時間までに、優しく思いやりがあるおにの子の人物像を読んでいった子どもは、「こんなに優しいおにの子だから、わにのおじさんはたから物をあげようと思ったのかな」と、たから物をあげようと思ったわにのおじさんの気持ちを考え始めていた。

そこで、第4・5時は、わにのおじさんが、おにの子にたから物をあげた理由を考えることを通して、わにのおじさんの人物像について読み取ることをねらいとした。

1) わにのおじさんの変容をおにの子の人物像と関連付けて考える

第1時に子どもがもった「どうして、わにのおじさんは、おにの子にたから物をあげたのかな」という問いを考える際には、第2・3時に学習してきたおにの子の人物像と関連付けながら考えることが大切であると考えた。したがって、学習の足跡を教室に掲示しておくことで、子どもが考えをつくる際に活用した。



2) 問いの共有

本時の問いを最初に確認した際、Y子は、「長い長い旅をして、命をかけて守ってきたたから物だから、わにのおじさんにとっては、ただのたから物ではなく、とても大切なたから物だよ。そんなに大切なたから物を、初めて会ったばかりのおにの子にあげてしまうなんて、よく分からないな」と発言した。それにより、子どもが第1時にもっていた「どうして、わにのおじさんは、おにの子にたから物をあげたのかな」という問いに「大切な」と「初めて会った」という言葉が加わり、「どうして、わにのおじさんは、初めて会ったおにの子に大切なたから物をあげたのかな」という、より具体的な問いになっていった。

3) たから物をあげた理由についての子どもの読み

「そして、しばらく、まじまじと、おにの子の顔を見ていましたが、やがて、そのしわしわくちやくちやくの顔で、にこっとしました。」という叙述の中の、「しばらく」や「まじまじと」、「やがて」という言葉に注目した子どもは、そこに時間の経過があることに気付いた。そしてO子は、「おにの子にたから物をあげようと決めるまでに時間が経っているから、わにのおじさんは、しばらく考えている」と発言した。

この部分の空所を考えることで、わにのおじさんが、初めて会ったおにの子に大切なたから物をあげた理由を読み解くことができると考え、授業を行った。その結果、たから物をあげた理由について、おにの子の人物像とわにのおじさんの人物像とを結び付けながら、子どもは考えをつくっていった。以下に、子どもの考えを示す。

①「たから物を知らない」おにの子の人物像と、わにのおじさんの人物像とを関連付けた読み

「君は、たから物というものを知らないのかい？」と言い、「おどろいてすっとんきょうな声を出し」たわにのおじさんの様子を表す叙述に注目し、子どもは以下のような考えをつくった。

- ・「たから物を知らない子がいたなんて。」と、とても驚いてすっとんきょうな声を出している。(D子)
- ・「自分の人生をかけて守ってきたたから物を知らないなんて、信じられない」と、とても驚いて、衝撃を受けている。(Y男)
- ・自分とは違って、たから物を知らないおにの子に、見せてあげたいと思った。(E子)

これらの意見を見ると、「わしをころして、わしのたから物を取ろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。」という叙述から、これまでのわにのおじさんの生き様や歩んできた人生を想像し、たから物というものを知らないおにの子の純粋さと対比して考えていることが分かる。

②「優しい」おにの子の人物像とわにのおじさんの人物像とを関連付けた読み

掲示した学習の足跡も参考にしながら、子どもは、これまで読み取ってきた「優しい」というおにの子の人物像に焦点化し、たから物をあげた理由について、以下のように考えた。

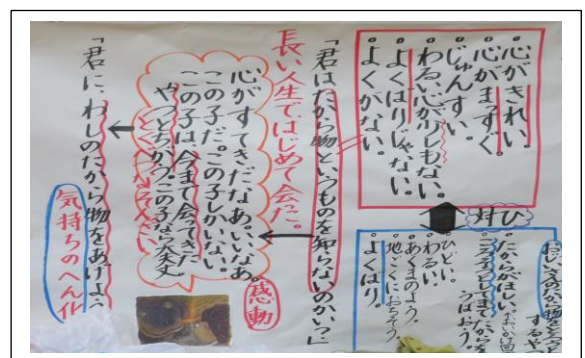
・「初めて会った自分のために、朝から夕方まで、一日中葉っぱをかけ続けてくれた優しいおにの子になら、たから物をあげてもいい」と思ったから。(K男)

「優しい」というおにの子の人物像に加え、さらに、上述した「わしをころして、わしのたから物を取ろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。」という叙述から想像できる、わにのおじいさんのこれまでの生き様とも関連付け、以下のような読みをついていった。

- ・「葉っぱをかけ続けてくれてありがとう。今までに会ったことのないくらい優しい子だ」とおにの子に感謝の気持ちを感じたから。(K子)
- ・「生まれて初めてこんなに優しくされた。今まで、命を狙われてひどいことばかりだったのに」と思ったから。(R子)
- ・「今まで、たから物を取ろうとするやつから逃げてきて、へとへとになっているし、殺されそうな目にあってきたのに、初めて優しくされて嬉しい」と感じたから。(F子)
- ・「殺してまでたから物を取ろうとするような、今まで出会ってきた悪い人達と、おにの子はちがう」ということが分かったから。(G子)
- ・「長い人生で今まで会った悪い人達とは違うから、この子なら自分の大切なたから物をあげてもいい」と考えたから。(H男)
- ・「自分が生きているうちに、こんなに優しい子にはもう会えないかもしれない」と思ったから。(H子)

上記の波線部は、わにのおじいさんがこれまで生きてきて出会った人達や経験した出来事と比較している部分である。

第5時の最後には、おにの子と、わにのおじいさんがこれまで出会ってきた人物達とを比較し、整理してまとめ直した。



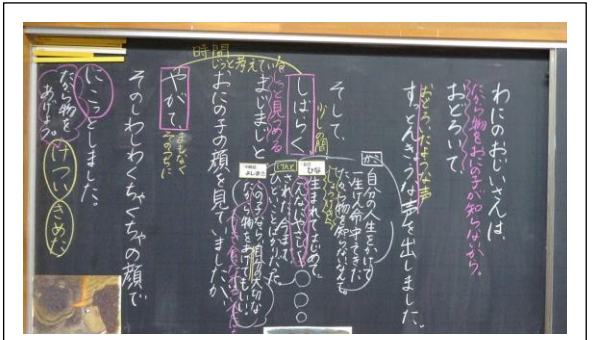
わにのおじいさんがこれまで出会ってきた、殺して、

たから物を取ろうとする奴を「悪い人」「欲張りな人」と考え、それと対比して、たから物を知らないおにの子は「心がきれい」「欲がない」と改めてとらえ直した。さらに、その対比が、「君は、たから物というものを知らないのかい？」と「おどろいて、すっとんきょうな声を出し」という叙述をつながっていることに子どもたちは結び付けて考えた。

「優しい」というおにの子の人物像を踏まえ、わにのおじいさんのこれまで出会ってきた人物や経験した出来事と比較することで、おにの子の「優しさ」やたから物を知らないという「純粹さ」「欲のなさ」が、際立って見えてきたといえる。

だからこそ、人生をかけて守ってきたたから物を、初めて会ったおにの子にあげたという、わにのおじいさんの大きな変容を読み取ることができた。

以上のことから、子どもは、たから物をあげた理由について、単に、おにの子は、「たから物を知らない」「優しい」からと関連付けるのではなく、わにのおじいさんの人物像や、わにのおじいさんがこれまで出会ってきた人物とも関連付けて考えていくことで、わにのおじいさんの変容を読み取ることができたと言える。



(4) 第6時の学習

子どもは第1時から、夕やけをたから物と思ったおにの子と、わにのおじいさんのたから物が違うことを、この物語のおもしろさと感じていた。第6時には、子どもがいちばん注目していた最終場面を考えた。夕やけをたから物と思ったおにの子の気持ちを想像することで、美しい夕やけに思わずぼうしを取るほど感動しているおにの子の気持ちを読み取ることができるとした。

1) おにの子がたどり着いた場所

「切り立つようながけの上の岩場」という叙述に注目し、おにの子が立っている場所の様子を確認した。「切り立つ」という言葉からは、「切ったようにまっすぐ険しく立つ」という様子、「がけの上」という言葉からは、「高い所」という様子が分かった。それらを踏まえて、おにの子は、「一歩でも踏み外すと下へ落ちてしまうような高い所」「とても高い場所だから、下へ落ちたら命を落としてしまうような危険な場所」にいると想像した。

おにの子が立っている場所の様子を考えていくと、

「どうしてこんな場所にたから物を埋めたのかな。」という問いが生まれた。この問いに対し、子どもは以下のような考えをつくった。

- ・たから物を狙っている人達から見つかりにくくするため。(Y男)
- ・危険な場所だと、なかなか取りに行きにくいから、悪い人達も行けないから。(T男)

このように、おにの子が立っている場所を踏まえた上で、下に記すように、夕やけをたから物だと思ったおにの子の気持ちを考えていった。

2) 夕やけをたから物と思ったおにの子の気持ち

夕やけをたから物だと思ったおにの子の気持ちが分かる叙述を探し、視写をした。そこに書き込みをして、おにの子の気持ちと行動について考えていった。

①目を丸くしたおにの子

「口で言えないほど美しい夕やけ」とは、「美しすぎて言葉では説明することができないほどの夕やけ」であると言いかえ、そんな夕やけが目の前いっぱい広がっている光景を想像しながら読んでいった。おにの子の前に広がる光景を、「周りが全部赤く染まっている」と想像した子もいた。

そんな光景を初めて見たおにの子の気持ちを想像すると、驚きと感動の気持ちから「目を丸くし」と子どもは結び付けていった。

②夕やけをたから物だと思ったおにの子

「これがたから物なのだ——」と「うなず」いたおにの子の気持ちについて、子どもは以下のように想像して発言した。

- ・すごいなあ。(O子)
- ・きれいだなあ。(A子)
- ・こんなに美しい夕やけが見られる場所があったんだなあ。(K子)
- ・たから物を知ることができてよかった。(O子)

上記の発言を聞き、I男は、「驚き」と「感動」の気持ちが混じっているとまとめた。そして、N子のように、「うなず」という言葉に注目し、夕やけがたから物だと納得するおにの子の気持ちを考える子もいた。

また、「世界中でいちばんすてきな夕やけが見られる場所なんだ——と思いました。」という叙述からも、おにの子の気持ちを以下のように想像した。

- ・わにのおじいさんは、こんなにすばらしいたから物を知っていたんだ。(R子)
- ・ありがとう。(H子・C子)

夕やけを見ながら、自分に大切なたから物をくれたおにの子への感謝の気持ちを想像した。

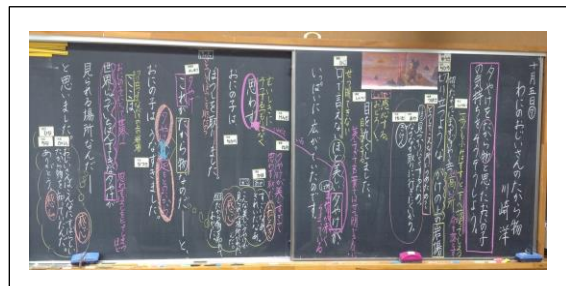
③思わずぼうしを取ったおにの子

以上のように、夕やけを見ているおにの子の気持ちを想像した上で、第2時から話題にあがっていた、「最後に思わずぼうしを取ったのはどうしてかな」という問いを考えた。「思わず」という言葉は、「無意識に」

「そうするつもりもなく」という意味があることを子どもは辞書で確認した。その上で、「口で言えないほど美しい夕やけ」や「世界中でいちばんすてきな夕やけ」という叙述と絵本の冒頭部分と結び付けて、以下のように考えた。

- ・角を隠すためにかぶっている帽子を思わず取ったんだから、それくらい、おにの子は夕やけがきれいだと感動したから。(K子)
- ・おにの子だということを帽子で隠して生きているけれど、その帽子を思わず取ってしまうほど、夕やけは美しく、おにの子にとって、世界一の夕やけだったから。(R子)

以上のように、絵本の冒頭部分とも関連付けながら考えることで、美しい夕やけに感動するおにの子の気持ちに迫ることができたといえる。



(5) 第7時の学習

第6時に、「これがたから物なのだ——」と「うなず」いた叙述に注目した際、Y男は、『これ』は、夕やけのことを言っていて、おにの子にとってのたから物は夕やけだけれど、わにのおじいさんのたから物は、足もとに埋まっているたから物を入れた箱のことだよ」と発言した。

その点に注目し、第7時には、「夕やけをたから物だと思ったおにの子」と「足もとに埋まっているたから物を大切に守ってきたわにのおじいさん」を対比し、それぞれのたから物の違いについて考えたことを話し合うことで、おにの子の心の美しさや純粋さに迫ることをねらいとした。

さらに、これまで学習してきたことと結び付け、つづき話を書いた。

1) おにの子の視点から考える

最初に、夕やけをたから物だと思ったおにの子に対して、「わにのおじいさんは、足もとにたから物が埋まっていることを教えてあげなかったから、おにの子は足もとのたから物が見られなかった。だから、おにの子はかわいそう」というR子の考えが出された。それに対して子どもたちは、以下のような発言をした。

- ・もともとたから物という物を知らなかったおにの子が、自分のたから物を見つけることができたのは、よかったと思う。(H子・K男)
- ・「おにの子はかわいそうじゃないよ。目を丸くするほど美しい夕やけというたから物を見つけれよよかったんだよ」(A子・K男)

- ・「おにの子にとって、世界中でいちばんきれいな夕やけを見ることができたんだから、よかったんだよ。おにの子は、嬉しいと思う」(I男)
- ・「夕やけという自然のものをたから物と感じたおにの子は、素敵だと思う」(K子)

このことから、叙述と結び付けながら、夕やけをたから物と感じたおにの子の心に寄り添って物語を読んでいることが分かる。最初に「おにの子がかわいそうだ」と発言していた(R子)も、その後に書いたつづき話の中で、考えの変容が見られた。(O子のつづき話については後述する。)

2) わにのおじいさんの視点から考える

わにのおじいさんの視点から、「わにのおじいさんは、たから物をおにの子に気がついてもらえなくて、かわいそうだ」と(C男)が発言した。この発言に対し、子どもたちは、「たから物ってどういうものか、君の目でたしかめるといい。」という叙述に注目して以下のような発言をした。

- ・「おにの子は、自分の目でたから物を見ることができたから、わにのおじいさんはよかったと言ってくれると思う」(J子)
- ・「おにの子にとって、世界中でいちばんきれいで、たから物だと思った夕やけの話聞いて、わにのおじいさんも素敵だねと言ってくれると思う」(U男)

このように、たから物を見つけたおにの子に対するわにのおじいさんの気持ちも想像しながら、おにの子とわにのおじいさんのたから物を対比して考えた。

3) つづき話を書く

上記の対話を通して、子どもは、「おにの子は、いつまでも、夕やけを見ていました。」という最後の一文のその先を考え始めていた。

そこで、「わにのおじいさんは、夕やけがたから物だったというおにの子の話聞いて、どんな言葉をかけるのかな」という子どもの問いをもう一度整理し、これまで学習してきた登場人物の人物像を生かしてつづき話を書く活動を行った。

つづき話を書く際には、「おにの子は、いつまでも、夕やけを見ていました。」の後につづく物語の設定として、おにの子はわにのおじいさんのいる川岸に戻ったこと、わにのおじいさんにたから物を見てきたことを報告することを確認して、つづき話を書く活動に入った。

子どもが書いたつづき話を、五つに分類して紹介する。(以下には、たから物は夕やけだったと報告した後のわにのおじいさんの反応を中心とし、抜粋して掲載した。したがって、前後の文は省略した。)

- ①わにのおじいさんは、おどろいて言いました。「君のたから物を見つけたならいい。」(M子)
- ②「えっ。」わにのおじいさんは、おにの子の顔を

まじまじと見て、考えてから言いました。「たから物が見られてよかったね。」(I男)

- ③おじいさんは、びっくりしました。(中略)「君は、夕やけというたから物を見られた。君は、たから物、たから物という物を見られた。わしは、たから物を見られただけでじゅうぶんだ。それを君だけのものだと思うといい。」(M男)
- ④おにの子は、「たから物の夕やけ、きれいだったな。」とつぶやきました。わにのおじいさんは、「えっ」「なあに?」「いや、なんでもない。」(中略)そして、おにの子は去って行きました。わにのおじいさんは、「本当は、あの子は、自分のたから物を見つけたんだ。それは、あの子のたから物だからいいな。」と言いました。(R子)

上記の①～④は、夕やけがたから物だったと報告するおにの子に対し、わにのおじいさんは、おにの子の純粹さに驚き葛藤しながらも、たから物を見つけれたら「いい」「よかった」と答えるだろうと想像している。(14名)

下に示す⑤は、「よかった」と言いながらも、おにの子が去った後に、がっかりしているわにのおじいさんの気持ちが表れている。(1名)

- ⑤わにのおじいさんは、しばらくなんて言ったらいいか考えていました。わにのおじいさんは、「自分ですてきなたから物を見つけてくれてよかったよ。」と言いました。(中略)本当は、わにのおじいさんが思っているたから物ではなかったで、がっかりしていました。(H子)

次に示すのは、わにのおじいさんが、「たから物は足もとにうまっている」ということを伝えると考えた子どものつづき話である。足もとのたから物の存在をおにの子に伝えると考えた子どもの中でも、さらに三通りに分類できると考えた。

下の⑥は、足もとにたから箱がうまっていると伝えたが、おにの子との会話を通して変容するわにのおじいさんを書いたつづき話である。(1名)

- ⑥わにのおじいさんは、「たから物はたから箱じゃ。」と少しきつい声で言いました。するとおにの子は、「夕やけじゃないのですか。」とおどろいた顔で言いました。わにのおじいさんは、「岩場をほっていったら、たから箱がうまっているんじゃないよ。」と言いました。それから、「早くしないとわしを殺そうとするやつに、うばわれる。わしは、わしを殺そうとするやつにうばわれないようにするために、お前さんにあげたんじゃよ。」すると、おにの子は「そんな。」と言いました。おじいさんは、「たから箱は…」と言いました。しかし、わにのおじいさんは、考えてつけたし、「君に、たから物という物を見せられたから、いいんじゃない。」と気持ちをかえて言いました。それか

ら、「自分のたから物を見つげられたから、よかったね。」と言いました。だけど、おにの子は、「でも、もう一回行って、たから箱を取ってきた方がいいと思うんですけど。そうしないと、おじいさんのたから箱をねらっている人にとられてしまわないですか。」おじいさんは、「いや、もういい。人それぞれ、たから物はちがうんだ。自分のたから物を見つけることができたなら、それでいいんだ。自分で見つげられたら、しあわせだろう。」とわにのおじいさんは言いました。(N男)

次に示すのは、足もとのたから物の存在を明かすつも、「よかった」「いいけいけんをした」と言うわにのおじいさんを書いたつづき話である。(2名)

⑦「えっ。」わにのおじいさんは、あんぐり口を開けました。そして、しばらく、まじまじとおにの子の顔を見ていました。やがて、しわしわくちやくちやの顔でにこっとしました。「どうしてタやけだと思ったのかい。」とわにのおじいさんは、おにの子に聞きました。(中略)「わしのたから物は、君が立っていた足もとにあったんだよ。だけど、タやけが見られてよかったのう。」(K子)

⑧「あれ？たから物は×じるしの下にうまっているんだよ！！」わには、びっくりするように言いました。でも、わには、「それでも、君には、君にとってのたから物を見つけることができたから、いいけいけんをしたと思うよ。」わにのおじいさんは、にっこりしました。(Y男)

最後に、下の⑨⑩のように、足もとに埋まっていることを伝えたまま終わっている場合や、うまっているからもう一度行くことを催促しているようなつづき話を書いている子どももいた。(10名)

⑨わにのおじいさんは、「え。」と言いました。おにの子に伝えたのに、見た物がちがうからです。わにのおじいさんは、「×じるしの所をほると、たから物の入った箱があるよ。」と言いました。(T男)

⑩「タやけがたから物だったよ。」「ちがうんだよ。土の中にうまっているんだよ。」「わしは守れないから、もう一回たから物をさがしに行け。」とわにのおじいさんは言いました。(O男)

以上のことから、子どもの書いたつづき話を分析すると、『タやけ』こそがたから物であると捉えているおにの子に対し、「書き手(読者)自身が『タやけ』をどう捉えているか」ということがよく分かる。

また、特に⑦⑧に分類されるつづき話を見ると、学習してきたわにのおじいさんの人物像と結び付けながらつづき話を書くことの重要性和課題も見えた。

(6) 第8時の学習

第7時に書いたつづき話を読んでおき、第8時には、お互いのつづき話を読んで考えたことを交流し合った。

子どもから、「みんなの考えが分かれているところがあった」「おにの子がたから物のことを報告した後、わ

にのおじいさんの言葉や反応が違っている」という意見が出され、わにのおじいさんとおにの子にかけた言葉に意見が焦点化していった。そして「わにのおじいさんは、土の中のたから物のことを、おにの子に言ったのかな」というR子の問いが共有され、全体で考えた。

「たから物は夕日だったよ」と言ったおにの子に対し、「違うよ。土の中にうまっているよ」とわにのおじいさんは言うだろうと考えた子どもに対し、R子は、「わにのおじいさんは、そんなことは言わないと思う。勉強してきたわにのおじいさんと遠いと思う」と、これまでの学習と結び付けながら考える発言をした。それをきっかけに、これまでの読みと結び付けながら、続き話を評価していった。以下に、交流の際の子どもの発言を記す。

- ・わにのおじいさんが、「もう一回たから物をさがしに行け。」なんておにの子に言うのはおかしい。おじいさんは、優しくなったから言うはずない。(R子)
- ・初めは欲張りだったけれど、おにの子のきれいな心に、おじいさんの心が動いたんだよ。(Y男)
- ・わにのおじいさんは、おにの子にあげてよかったと、おにの子に感動していると思う。だから、「たから物が間違っているよ。」なんていうことは言わないと思う。(K子)

このように、わにのおじいさんが、おにの子にたから物をあげようと思変容した場面の読みと結び付け、タやけをたから物だと思おにの子の純粹さに、さらに感動したり心を動かされたりしたわにのおじいさんの気持ちを想像しながら、つづき話を評価することができた。

また、叙述と結び付け、おじいさんが足もとにたから物がうまっていることを教えないだろうと考えた子どももいた。

- ・わにのおじいさんは、「たから物ってどういふものか、君の目でたしかめるといい。」と言っているから、おにの子に自分で見つけて欲しいと思っているんだよ。だから、埋まっていることは言わないよ。(M子)
- ・わにのおじいさんは、自分で自分のたから物を見つげられたからよかったと思っているんじゃないかな。だからおじいさんは、「よかったね。」と言うと思う。(K子)
- ・命より大切なたから物だから、そんなに簡単に「よかったね。」とは言わないと思う。ずっと考えてから、「よかったね。」と言うと思う。(A子)

上記のA子の考えは、学習してきたわにのおじいさんのこれまでの生き様とも関連付け、わにのおじいさんの気持ちを考えた。

授業の終盤では、Y男が、「自分の守ってきたたから物を見つけてもらえなかったわにのおじいさんは、ぼ

くは、かわいそうだと思う。」と発言した。それに対する子どもの考えを以下に示す。

- ・わにのおじいさんは、おにの子はたから物を知らないから、たから物が分かったならそれでいいと思っている。(T男)
- ・おにの子は、夕やけがたから物だと思っているから、おにの子のたから物も、ひとつのたから物だと思っていると思う。(A子・K子)

このように、子どもはお互いのつづき話を読み合い、学習してきた人物像と関連付けながら、評価し合った。

(7) 第9時の学習

1) つづき話を書き直したり書き加えたりする

第8時に、お互いのつづき話を評価し合う活動を行ったことで、子どもからは「つづき話を書き直したり、書き加えたりしたい」という思いが生まれた。第9時は、第8時に交流し評価し合った内容を生かして、自分のつづき話を見直し、書き直したり書き加えたりすることをねらいとした。

子どもは、第8時の交流を通して、より作品の内容と結び付けながらつづき話を書き直したり書き加えたりすることができた。

最後に、「書き直したり書き加えたりしたつづき話を読んでみたい」という子どもの声に応え、何人かの作品を紹介し、どの部分がどのように変わったか再評価をし合った。さらに、授業終了後に、全員分のつづき話を印刷して配付し、読み合った。すると、単元終了後も、お互いに変変わった部分を伝え合ったり感想を言い合ったりしている子どもの姿が見られた。

子どもが書き加えたり書き直したりした続き話や、再評価し合った内容については、「6 分析と考察」の「成果と課題」において述べることとする。

6 分析と考察

(1) 成果

1) 子どもの学びの分析

①M子について

M子は、自分のつづき話を以下のように書き直した。

①わにのおじいさんは、少し、だまっていたんですが、やがてこう言いました。「そうか。自分の目で、たから物を確かめられたか。よかった。」おにの子が帰ると、わにのおじいさんは、「わしの本当のたから物があるところに、もう一つたから物があるんだなあ。」とおじいさんはおどろきながら言いました。その時、同時に、「やっぱりあの子にあげてよかったなあ。夕日をたから物と思うなんて。感心したなあ。」と思いました。

M子は、最初は、「君のたから物を見つけられたならいい」としかわにのおじいさんの言葉を記述していなかったが、第8時の交流を経て、夕やけをたから物だと思ったおにの子に対するわにのおじいさんの気持ちを想像しながら、つづき話を書き直した。

単元の学習を終え、M子は以下の感想を書いた。

つづき話を書いて、一回目は、全く人物について考えて書いていなかったけれど、勉強をして二回目を書いたら、もっと人物についてくわしくつづき話を書けた。

さらに、最後にM子は、「わにのおじいさんは、おにの子のきれいな心を感じることができたんだね。だから、『あげてよかった。』と言ったんだね。」と友達から再評価をされた。

以上のことから、M子は、第8時の交流を通して、わにのおじいさんの人物像と関連付けながらつづき話を書こうとしていたことが分かる。友達の話の聞いたり、友達のつづき話を読んだりすることを通して、より登場人物の人物像と結び付け、想像をふくらめながら、つづき話を書くことができた。

②O男について

O男は、自分のつづき話を以下のように書き直した。

⑩「夕やけを見ましたよ。」「え……。」「おじいさんは、世界一きれいな夕やけをずっとずっと守ってくれていたんだね。」「よかったね。自分で自分のたから物を見つけられて。」その日から、ずっとずっとおにの子は、自分で見つけた自分の夕やけを見ていました。

O男は、最初のつづき話を書いた時には、「もう一回たから物をさがしに行け」とわにのおじいさんは言うだろうと考えていたが、第8時の交流を経て、「よかったね。自分で自分のたから物を見つけられて」という言葉に書き直していることから、大きく考えが変容していることが分かる。

その要因については、第8時の交流の際、R子がO男の考えたわにのおじいさんの言葉を取り上げ、「『もう一回たから物をさがしに行け』なんておにの子に言うのはおかしい。おじいさんは、優しくなったから言うはずない」と発言し、話し合いが始まったことがきっかけだったと考える。交流を通して、O男は、「5(6)第8時の学習」で前述したような、Y男やK子、A子など多くの子の考えに触れ、学習してきた人物像など、作品の内容を踏まえてつづき話を書くことの重要性に気が付いたと言える。

単元の学習を終え、O男は以下の感想を書いた。

一回目は、わにのおじいさんのせいかくを考えながら全然書けなかったけれど、友達の意見を聞いて、二回目は、わにのおじいさんのせいかくやいろいろ勉強したことをいかして書けた。友達から意見をもらったことが大きくて、わにのおじいさんの優しいせいかくや気持ちを考えながら、もう一回文章を読んで、つづき話を書き直した。

この感想からも、友達との交流によって、登場人物の人物像を踏まえ、友達の意見や続き話を参考にしながら、O男が作品の内容と結び付けてつづき話を書くことができたことが分かった。

最終時の最後に、修正したつづき話を書き上げた子

どもから、「0男の書き直したつづき話が聞いてみたい」という声が上がった。0男の書き直したつづき話を聞いた子どもからは、「わにのおじいさんらしい言葉だね」「わにのおじいさんは、おにの子のきれいな心に感動しているね」という声上がり、0男のつづき話は、友達によって再評価され、価値付けられた。

以上のように、一回目は、学習して来た人物像を生かして書くことが難しかった子どもも、第8時における交流を通して、より人物像と結び付けたつづき話を書くことができたという実感をもつことができたことが分かった。

2) 子どもの学びの分析から見えた成果

本研究では、つづき話をお互いに読み合う過程を意図的に配置することで、つづき話を作品の内容と関連付けながら評価していくための実践を行った。その結果、つづき話を書くという言語活動の先に、評価し合う活動を設定し、内容と関連付けながら評価することで、単元前半の活動と単元後半の言語活動につながりが生まれ、適切に物語を読むことができるということが明らかになったと言える。

また、本作品は、おじいさんがおにの子にどんな言葉をかけるのかについて、それぞれの読みが分かれるところにおもしろさがあると考えられているが、子どもはお互いのつづき話を読み合い、評価し合う活動をすることで、様々な価値観があることに気付き、これまでもっていなかった価値観にも触れることもできたと言える。

(2) 課題

1) 子どもの学びの分析

①N男について

N男は、自分のつづき話を以下のように書き直した。

⑥おじいさんは、「たから箱は…」と言いました。しかし、わにのおじいさんは、考えてつけたし、「自分のたから物を見つけられたから、よかったね。」と言いました。おじいさんは、「人それぞれ、たから物はちがうんだ。自分のたから物を見つけることができたなら、それでいいんだ。自分で見つけられたら、しあわせだろう。」と言いました。

最初に書いたつづき話と比較すると、N男は、書いたつづき話の大部分を消してしまっている。具体的には、おにの子から夕やけがたから物だと聞き、最初は少し感情的になって、自分を殺そうとする奴らに奪われてしまうとおにの子に話すわにのおじいさんが、途中から考え直し、気持ちを变えて、「君に、たから物というものを見せられたから、いいんじゃない。」という部分がなくなってしまった。おじいさんが、おにの子との会話を通して変容するというN男のつづき話のよさが、書き直しを経て、全て消えてしまったことは課題である。

N男は、単元の学習を終え、次のように感想を書いた。

おにの子とわにのおじいさんの勉強したことをいかして一回目に書いた。例えば、せいかくや言葉づかいにも気を付けて書いた。けれど、話し合いをして、わにのおじいさんのせいかくがまだ十分足りていないと思ったから、二回目は優しいおじいさんのせいかくに直した。

この感想から、N男が自分のつづき話を消してしまったのは、第8時の交流を通して、「わにのおじいさんは、おにの子に会って優しくなった」という発言の影響を受けていると考えられる。わにのおじいさんは、おにの子によって優しくなったのだから、おにの子に対して怒らないだろうという思考が働き、N男はおじいさんの変容の部分を消してしまったと言える。

さらに、一回目と二回目のつづき話を読み比べてみて、最初のつづき話のよさに触れるような友達からの評価が見られなかったのが、残念である。

N男の例から、最初のつづき話を正當に評価していくことの重要性を課題としてあげる。最初に書いたものと、書き直したつづき話を比較し、内容と関連付けながら再度考え直す機会を十分に保障することで、適切に評価をすることが大切であると考えられる。

【引用および参考文献】

浜本純逸・大岡信・野地潤家・新井満ほか38名(2015)『みんなと学ぶ 小学校国語三年下』,学校図書株式会社

全国大学国語教育学会 浜本純逸(2001)『国語科教育第四十九集』 住田勝・山元隆春・上田祐二・三浦和尙・余郷裕次「文学作品を読む能力の発達に関する研究——〈つづき物語〉の量的分析を中心として——」,全国大学国語教育学会 浜本純逸 p57-64

国語教育史学会 田近洵一(2017)『国語教育史研究第17号』 芳賀純一「教材研究ができない教師」,国語教育史学会 田近洵一 p7-12

川崎 洋(2008)『ぼうしをかぶったオニの子』,あかね書房